



一般教育演習（フレッシュマンセミナー）グローバル・キャリア・デザイン3：
第17回ファースト・ステップ・プログラム（FSP）北米

全体報告書

2017. 02. 13 ~ 02. 27



目次

| | |
|----------------------------|-----|
| ファースト・ステップ・プログラム (FSP) とは？ | 2 |
| メンバー・班紹介 | 4 |
| 日程 | 6 |
| 準備授業 | 7 |
| 海外研修 | |
| 教育機関 | 9 |
| 協定校 | 1 1 |
| 企業・組織 | 1 4 |
| 参加者アンケート | 2 1 |
| 編集後記 | 2 5 |
| 謝辞 | 2 6 |

ファースト・ステップ・プログラム(FSP)とは？

正式名称は「一般教育演習（フレッシュマンセミナー）：グローバル・キャリア・デザイン」で、通称「ファーストステッププログラム（FSP）」という。全学教育科目の1つであり、2単位が取得可能である。

海外の協定校等や教育機関を訪問しての授業見学・学生交流や、国際機関や国際的に展開する企業の見学、さらにはそこで実際に働いている社会人の方々のご講話を聞くのが主な活動となる。1プログラムの定員は約20名で、海外研修時は集団行動が必須となる。

このプログラムは年に4～5回実施され、2016年度春季には北米の他にアジア、中国コースを開講した。なお、北米コースは2015年度の春季から開講されたものである。（パンフレットより抜粋）

・応募資格

北海道大学の1・2年生であること、必要最低限の英語能力を持っていること、留学や国際協力、国際交流等に高い興味があること、協調生や積極性があること、などがある。参加者の選考には、書類選考と面接が行われる。また、独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）から奨学金による参加費用の補助があるが、それには一定ラインの大学（夏季プログラム参加の1年生の場合は入試）での成績が必要になっている。（募集要項より抜粋）

・私たち記録広報班が考えるファースト・ステップ・プログラム（FSP）の特徴

その名前からも分かる通り、このプログラムの目的は、次の海外プログラムにつなげるための第一歩を踏むことにある。そしてその先にはグローバルに活躍できる人材となることを視野に入れている。そのために、海外とはどんなものなのか、留学とは実際どんな感じなのかということを経験したり、今後の進路の決断のための情報収集ができるように構成されている。そのため、将来の留学のための準備としての体験や、職業像を考えるための体験、国際協力について考えるための体験など、様々なことが体験できる。

また、離れた複数の都市を訪れることができるというのも、このプログラムの特徴の1つである。今回の北米コースでは東海岸のアマースト、ニューヨーク、西海岸のポートランドの合計3都市を訪れた。

※第 17 回 FSP 北米の場合、受給用件を満たした学生には、JASSO から 8 万円の奨学金が支給された。参加費用（ホテル、飛行機、専用車借上げ代）が約 35 万円、現地での交通費・食費・雑費が約 7～8 万円、その他スーツケースやパスポートなど、海外渡航に必要なものを揃える費用なども含め、最終的に費用は 36 万円前後となった。

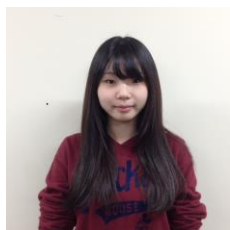
※本頁以降、本報告書では、第 17 回ファースト・ステップ・プログラムを「FSP」もしくは「FSP 北米」と呼称する。

メンバーおよび班の紹介(学年は参加当時)

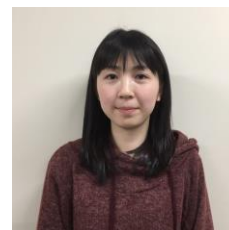
総務企画班…訪問校のしおり作成、学生交流の企画運営を担当。



総合理系-1年
野口 真司
リーダー

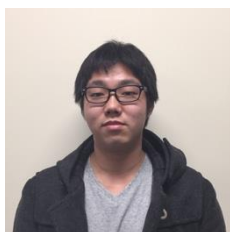


法学部-1年
伊藤 彩
サブリーダー

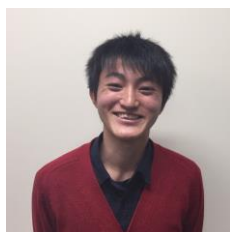


農学部-1年
備前 知風優

記録広報班…FacebookなどのSNSでの情報発信、全体報告書作成・帰国報告会でのプレゼンテーションを担当。



工学部-2年
孫 津韜 (班長)



工学部-2年
橋本 直暉

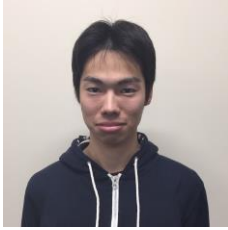


総合理系-1年
並木 飛鳥

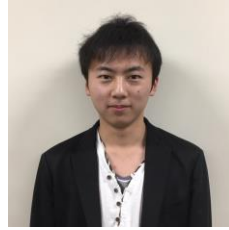


理学部-1年
田畑 陽太郎

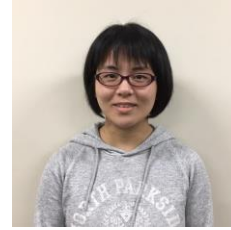
企業訪問班…訪問企業・組織の調査、議事録や企業訪問のしおり作成を担当。



理学部-1年
浅田 翔大 (班長)

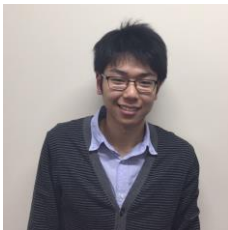


工学部-1年
大野 健太



工学部-1年
中山 智香子

プレゼンテーション班…現地の大学生に日本、北海道や北海道大学について紹介するプレゼンテーションを担当。



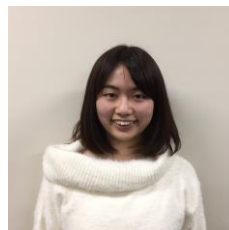
医学部-1年
山口 翔 (班長)



法学部-2年
續 朔也



工学部-1年
石川 隼



歯学部-1年
藤原 ひかる

研修日程

| 日次 | 日にち | 活動内容 | 宿泊地 | |
|----|---------|---------------------------------------------------------------------------------------------|------------|-----|
| 1 | 2/13(月) | 新千歳発、成田経由でボストンへ移動し、 ボストンからバスでアマーストへ移動 | アマースト | |
| 2 | 2/14(火) | 午前 訪問国調査活動 午後 協定校訪問 (マサチューセッツ大学アマースト校) | | |
| 3 | 2/15(水) | 終日 協定校訪問 (マサチューセッツ大学アマースト校) (午前 Center for Intelligent Information Retrieval 訪問) | | |
| 4 | 2/16(木) | 午前 振返りミーティング バスでニューヨークへ移動 午後 国際連合本部見学 | ニューヨー ク | |
| 5 | 2/17(金) | 午前 City University of New York (CUNY) Queens College 訪問 午後 Morgan Stanley 竹田勝男副社長のご講話 | | |
| 6 | 2/18(土) | 終日 訪問国調査活動 | | |
| 7 | 2/19(日) | 午前 訪問国調査活動 午後 ニューアーク発、ポートランドへ移動 | ポートラン ド | |
| 8 | 2/20(祝) | 終日 協定校訪問 (ポートランド州立大学) 夕方 振返りミーティング | | |
| 9 | 2/21(火) | 終日 協定校訪問 (ポートランド州立大学) | | |
| 10 | 2/22(水) | 午前 ポートランド市開発局 山崎満広国際事業開発オフィサーのご 講話 午後 Grant High School 訪問 | | |
| 11 | 2/23(木) | 午前 オレゴン日系レガシーセンター訪問、振返りミーティング 午後 PSU 経済学部 伊藤宏之教授のご講話、振返りミーティング | | |
| 12 | 2/24(金) | 午前 東京応化工業アメリカ本社 室井雅昭部長、Ms. Sayo Duberow のご講話 午後 EPSON Portland Inc. 織田吉夫常務のご講話、終了後、会食 | | |
| 13 | 2/25(土) | 午前 ポートランド日本語継承学校にてボランティア (希望者8名の み) 午後または終日 訪問国調査活動 | | |
| 14 | 2/26(日) | ポートランド発バンクーバー、 | | 機中泊 |
| 15 | 2/27(月) | 成田経由で新千歳へ移動 | | |

準備授業

準備授業によるサポートがしっかりしているというのも FSP の特徴の 1 つです。全 5 回の準備授業は海外経験の少ない参加者がしっかりと初めの一步を踏み出すために必要不可欠なものです。その概要を紹介します。

第 1 回

北米・中国・アジアの 3 プログラム合同の準備授業で、引率の先生方の紹介がありました。また FSP という授業の概要の説明を受けました。その後、メンバー 1 人 1 人の自己紹介をし、最後に役割決めを行いました。総務企画班、企業訪問班、プレゼンテーション班、記録公報班にメンバーを分けました。

第 2 回

3 プログラム合同授業で、まず参加者同士で名前を覚えるアクティビティを英語で行いました。名前と専攻、趣味などを自分のことだけでなく、自分の前に言った人の分も言うという内容でした。その後、渡航までに少しでも英語の向上をできるようにと FSP 参加者のための英語学習法講座がありました。そこから、キャリアデザインとはなにか、課題、成績評価基準などについての説明を受けました。

第 3 回

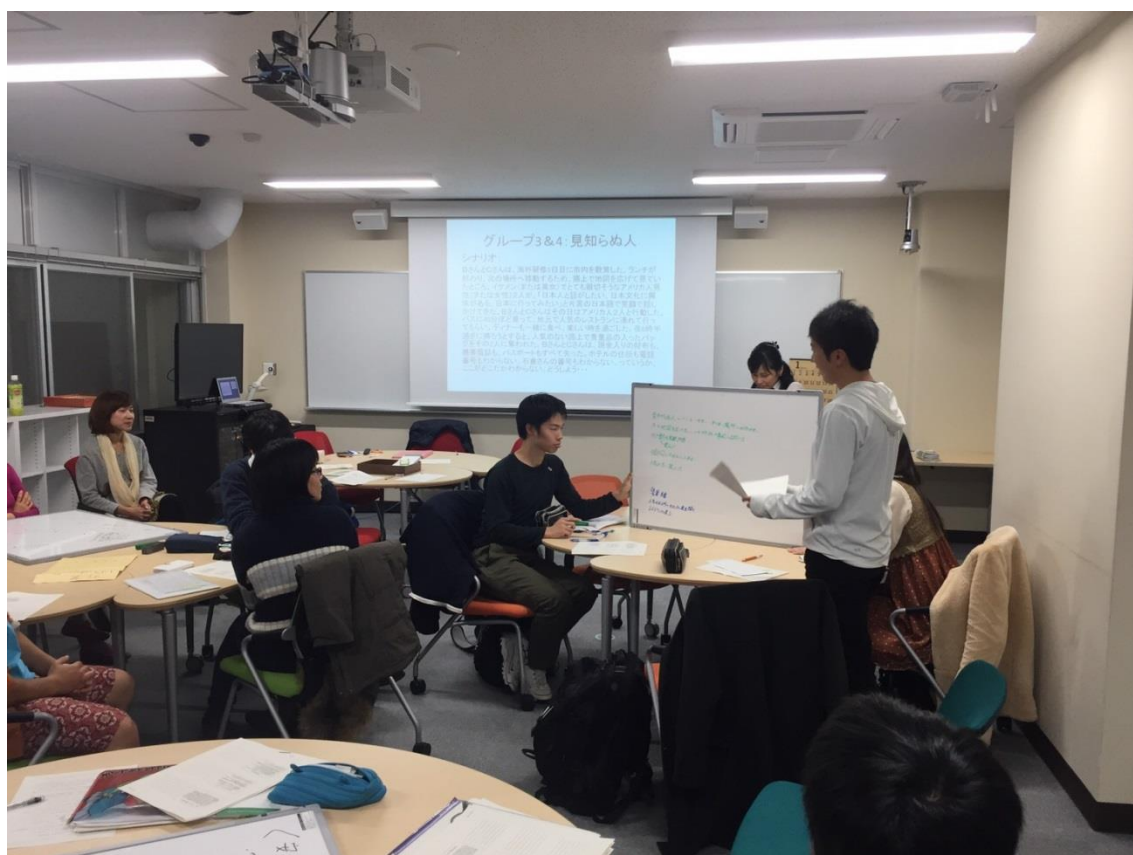
3 プログラム合同授業で、まず、異文化理解、異文化コミュニケーションとはなにかについて考えました。また、FSP は大人数の集団・チームで行動するので、チームの力を体験するために、短時間で現地の学生と行う交流アクティビティを考えるということをしました。短時間でたくさんのアイデアが生まれ、チームとしての団結力が生まれるとともに、その力を実感しました。

第4回

初の北米プログラムのみの準備授業でした。渡米中の危険を回避するための心得などを教えていただきました。その一環としてケーススタディを行いました。熱を出して、企業訪問へ行けなかった場合、見知らぬ人についていって荷物をとられて途方にくれた場合、の2つのケースに分かれ、グループで、どうすればその事態を避けることができるか、また、起こってしまった場合は次にしなければならないことはなにか、を話し合いました。

第5回

北米プログラムとアジアプログラムの合同準備授業で、プレゼンテーション班が現地の教育機関で行うプレゼンテーションのリハーサルと、それへのフィードバックを行いました。事前に良い聴衆の条件と効果的なフィードバックの仕方を学び、実践しました。最後の準備授業ということもあり、海外研修に必要な資料が多く配布されました。



第4回準備授業の様

教育機関訪問

FSP 北米では北大の協定校への訪問だけではなく、ニューヨーク市にある大学やポートランド市にある高校にも訪問しました。

Queens College, City University of New York (CUNY)

City University of New York (CUNY・ニューヨーク市立大学)の1つである Queens College はニューヨーク市クイーンズ区にある大学で、持続可能性への深い関与のため、アメリカでは「Green (環境にやさしい) College」に選ばれています。

訪問時には、Queens College の学生に北海道、札幌、そして北海道大学を紹介するプレゼンテーションを行ったあとに、小グループに分かれて自己紹介をして、英語と日本語で会話をしました。その後、児童発達の研究をしている野村洋子教授の研究室に伺ってお話を伺いました。先生は日本人でいらっしゃいますが、主に英語を使って研究内容についてご説明くださり、また、何名かの研究室の学生さん達も自身の研究について説明してくださいました。野村先生の、「日本人になろうとするのではなく、グローバルになろうとするべきである」、というお言葉が印象的でした。昼食は Queens College の学生と食べました。話は盛り上がり、帰り際には名残惜しくハグをしている学生も見られました。



Queens College 訪問時の集合写真



Grant high School 訪問時の集合写真

Grant High School

ポートランド滞在の3日目は、ポートランド学区の日本語イマージョンプログラムで5歳から日本語を勉強している生徒たちが進学するグラント高校を訪問しました。小学校で行われているイマージョン教育とは、理科や社会、算数など、一般の教科を習得したい言語で学ぶことで自然とその言語を身に付けることを目的とする教育プログラムです。

州によっても異なりますが、アメリカの高校は4年制であることが多く、日本の高校1～3年生は10～12学年と表現します。今回は日本の中学3年生にあたる9年生、高校1年生にあたる10年生の、イマージョンクラスである「歴史と文化」アドバンスクラスにお邪魔して、生徒の皆様と交流させていただきました。実際の授業を見学させていただきました。

クラスではたくさんの絵の中から鳥獣戯画や、葛飾北斎の絵を区別するなど、レベルの高い日本語授業を行っていて驚きました。その後、校内を案内してもらった際に訪れた図書館では、日本の漫画が多数置いてあるのを発見しました。教室に戻ってからは、グループに分かれ、トピックを決めて日本語でフリートークをしました。このアクティビティを通じて、アメリカの高校生の生活を垣間見ることができ、またアメリカの高校生のナマの声を聞くことができたことが新鮮でした。

今年の6月には、グラント高校から16名の生徒が北海道大学を1日訪問してくるということなので、再会できるのが今から楽しみです。

協定校訪問

FSP 北米では、北海道大学の協定校である、マサチューセッツ大学アマースト校（以下 UMass とする）と、ポートランド州立大学（以下 PSU とする）を訪問し、歓迎していただきました。この 2 校で行った活動を報告します。

マサチューセッツ大学アマースト校 (UMass)

UMass は北海道大学の前身である札幌農学校の初代教頭、ウィリアム・クラーク博士が 3 代目の学長を務めた、北海道大学とゆかりの深い大学です。

訪問 1 日目にはまず、UMass の国際課の職員の方々から UMass の留学先としての魅力や大学のシステムなどの情報を教えていただきました。UMass はボストン校、ダートマス校など、全部で 5 つの大学からなる州立大学システムをとっています。その中でもアマースト校は「Flagship」（旗艦校）校であり、UMass システムの中で一番大きな大学です。



UMass で説明を受けている様子

私たちの訪問日がちょうどバレンタインデーだったこともあり、アメリカのバレンタインデーについて、日本との違いなども含めて教えていただきました。英語での説明だったので、全てを理解することは難しかったが、わかりやすく説明していただいたので、大筋は理解することができました。その後は日本語を学んでいる学生にキャンパスツアーへ連れて行っていただきました。北海道大学よりも広い敷地で歩いて回るのは一苦勞でしたが、都会から離れたアマーストの綺麗な景色やおいしい空気を味わうことができました。夕食前に現在 UMass に留学している日本人の方からお話をうかがうこともできました。友達ができるか、UMass での研究室配属についてなど留学や海外生活に対する不安などを相談することができました。

訪問 2 日目の午前中は Center for Intelligent Information Retrieval (CIIR) という北海道大学と共同研究を行っている UMass 内の研究組織にうかがい、組織そのものについてや北海道大学との研究協力についてご説明いただきました。その後、3 つのグループに分かれて研究室を案内していただき、コンピュータサイエンスやロボティクスの研究内容をお話いただきました。少



CIIR で説明を受けている様子

し専門的な内容もあり、理解するのは大変でした。ランチは、UMass の学生と一緒に学生食堂で食べました。日本語を勉強している学生が多かったのですが、1年目なのに日本語を使った会話ができ、アメリカの言語教育の方法が気になりました。昼食後は植物が育てられている温室で、植物研究をされている教授から色々な植物を紹介していただきました。匂いの良いものや、葉の色の違うもの、穴の空いているものなど様々で、私たちからの質問にも笑顔で丁寧に答えてくださいました。その後、UMass で実際に行われている授業を見学させていただきました。土壌や化学、日本語の授業に分かれてそれぞれのクラスを訪問しました。一日の終わりには、サッチャーインターナショナルハウスという外国語を学習する学生が住んでいる寮で、日本や日本文化に興味のある学生を相手に、北海道大学の留学先としての魅力を紹介し、交流を図りました。

ポートランド州立大学 (PSU)



プレゼンテーションの様子

PSU は札幌と姉妹都市であるポートランド市にある大学で、北海道大学とはゆかりの深い協定校です。PSU 訪問 1 日目は、まずポートランド市と PSU の魅力について紹介していただきました。ポートランド市は全米 1 住みたい街として選ばれるような街であるので、その紹介も非常に魅力的に感じました。

次に 2 つのグループに分かれて PSU での講義を見学させていただきました。見学させていただいたのは、国際政治学と、方丈記の授業でした。ランチを食べた後にはキャンパスを案内していただきました。大学が街と一体になっているようで、街を歩いていて気がいたら大学の中にいるといったこともあるほど、建物の様

式や高さなども街に溶け込んでいました。雨水の再利用や、共同ファームなど、ポートランドや、大学内で行われている活動などの紹介もしていただき、とても興味深かったです。

PSU 訪問 2 日目は、プレゼンテーションを 3 つ拝聴しました。まず、アメリカの大学院で学ぶことについて、大学院研究顧問兼学生支援コーディネーターの方から説明いただいたのち、キャリアアドバイザーの方から、アメリカで働くことについて色々と教えていただきました。ランチをはさみ、留学生としてアメリカで学ぶことについて、PSU で留学生生活アドバイザーをやっていらっしゃる日本人女性からお話を頂戴しました。全てのプレゼンテーションが FSP 参加者のセカンドステップ、サードステップの参考になるお話で、FSP 北米の次のステップを考えることにとってもためになりました。その後、PSU の学生に向けて北海道大学の留学先としての魅力をプレゼンテーションで伝え、自己紹介や伝言ゲームを使った交流アクティビティやフリートークを通して交流を図りました。



PSU での記念撮影

企業・組織訪問

国際連合本部

国際連合本部はニューヨーク、マンハッタンに位置していますが、その土地はアメリカのものではなく、国際連合の所有であるとのことでした。

国際連合本部ではツアーに参加し、会議室などを見学しました。ガイドの方は

日本人でしたが、私たちのグループに日本人以外の方が2名いらっしゃったため、英語で説明をしてくださいました。国際連合本部の仕事や歴史、会議についてなど、たくさんのことを学ぶことができました。実際に会議をしている会議室の中も通ることができ、とても貴重な経験をすることができました。また、ガイドの方からは、国際連合本部でガイドとして働くことについて



国際連合本部での記念撮影

でも様々なことを教えていただくことができました。

英語の他に最低でも2つの言語を操ることができないといけないとのことでした。また、ガイドを

されている方の多くは大学院を卒業しており、国際協力や国際開発の分野を専攻していた人が多いそうです。建物の外では教科書などで良く見かける、発射不能の銃などのモニュメントを見ることができ

ました。

Morgan Stanley 様 竹田 勝男 副社長

Morgan Stanley 様は、ニューヨークに本社を置く世界的な金融機関です。そこで副社長としてご活躍されている竹田様よりご講話を頂戴しました。高校卒業後4年間、空白期間があったことや、米国での大学時代、学費を稼ぐために夏休みにアラスカで鮭漁のアルバイトをしていたこと、在学中、大学で少林寺拳法を教え奨学金を受給されたことなど、竹田副社長の若い頃の破天荒なご経験を伺うことができました。そのすべてが今の自分を形作っているというお言葉が胸に残りました。竹田副社長は身体的にも精神的にもエネルギーの塊のような方で、海外の第一線で活躍するためにはこのようなパワーが必要なのだと強く感じました。

また、お話の中で繰り返し仰っていたのは、失敗してもいいからとにかくやってみるということでした。参加者の一人が将来会社を作って独立するためには



竹田副社長と記念撮影

何が必要か質問した際に、「まず日本に帰ったら会社を作ってみればいい。そしたら必ずうまくいかなくて必要なことが見えてくる。」という主旨のこと仰っていたのがとても印象的でした。また、大事にされている言葉として、米バスケット界のスターであるマイケル・ジョーダン氏が言った、「I can accept failure, but I cannot accept not trying.」を教えてくださいました。失敗は許せる、許せないことはやらないことだという意味で、20代のうちに失敗を恐れずにどれだけ挑戦し、自分の伸びしろをいかに広げることができるかが人生において重要であるということをお教えいただきました。なかなか思い切って行動することは難しいと感じることが多いですが、失敗

を恐れずに行動することの大切さをひしひしと感じ、大きな刺激を頂きました。

ポートランド市開発局 様 山崎満広 都市開発部国際事業部開発オフィサー

ポートランド市開発局様では、山崎満広様からご講話を頂戴しました。ポートランド市は、過去10年にも渡って全米一住みやすい街に選ばれ続けています。そのポートランド市の街づくりに貢献なさっている山崎様のお話はとても興味深いものでした。



ポートランド市開発局様でのご講話の様子

ポートランド市が住みやすい街になった理由としては、ポートランド市にはこれまでになかったものを作り出すデザイナー達が集まっている街であるということをおっしゃいました。その証拠に、ポートランド市は取得している特許数が全米で6番目に多いとのことでした。

ポートランド市が開発を行っている方法は、日本のそれとは大きく異なるということがわかりました。日本では出来上がった計画の賛否を市民に問うというのが一般的ですが、ポートランドでは、コミュニティワークショップを利用して市民から計画案を積極的に出してもらっているそうです。また、準独立型の機関であるポートランド市開発局様の存在のおかげで、市長が変わったりしても、ビジョンを保つことができるようになっており、市民の意見を取り入れた長期的なビジョンを持って投資が可能となっているそうです。

現在のポートランド市では1週間に約350人が移住してくるそうで、2030年までには人口100万人増との予測があるそうです。人口増加に伴うホームレスの増加や、住宅不足が問題になっており、今後はそれらの問題に取り組んでいきたいという意気込みも語っていただきました。

ポートランド市の街づくりについてもっと知りたいという人には、山崎さんの著書である「ポートランド 世界で一番住みたい街をつくる」を読んでみることをお勧めします。

オレゴン日系レガシーセンター 様 Hiroko Stacey 様

日系レガシーセンター様はポートランド市ダウンタウン北部にある、かつて日本街であった地域に位置しています。様々な企画・イベント・展示を通して日系アメリカ人の歴史を知ってもらうための活動をなさっています。私たちが訪問した際には、ボランティアガイドの、Hiroko Stacey 様が展示物について詳しくご案内くださいました。

このセンターでは、オレゴン州に住んでいた日系人の暮らしや、強制収容所での生活についての展示が行われていました。ドルの価値が日本円と比べて高かった頃には、経済的に厳しかった日本の人々が仕事を求めてアメリカに来て働いていたそうですが、第2次世界大戦がはじまり、日系人の方々に対する誹謗や差別が強くなっていったそうです。そしてフランクリン・ルーズベルト米大統領が

1942年に署名・発令した大統領令 9066号によって、日系人の方々は強制収容に送られることになりました。ほとんどの参加者はこの歴史について知らなか



Stacey 様にご説明いただいている様子

ったのですが、今回の訪問で当時の日系人の方々の収容所での過酷な生活について学ぶことができました。

戦争が始まり、日本に帰る方々も多かったそうですが、すでにアメリカで家庭を築いている方も多く、そういった方々はアメリカに残っていたそうです。また、日系2世として生まれた方が祖国（アメリカ）のために兵士になることもあったようです。親は日本人であるので、親の母国が敵国になるというとても残酷な状況があったということを知りました。このような悲劇を繰り返さないためにも、歴史を学んでいかなければいけないという思いが強まりました。

ポートランド州立大学 様 経済学部 伊藤宏之教授

伊藤教授のご講話はリラックスした雰囲気で行われ、最初に伊藤教授からご略歴を紹介頂き、その後、時間の多くを参加者からの質問に対し伊藤教授がご回答するというような形式で行なわれました。海外で教授として職を得られるまでのご経緯や、現在のアメリカや世界が直面する課題等についてお話を伺いました。



伊藤教授のご講話の様子

伊藤教授は学生の頃、自分のほかに日本人留学生が一人しかいないような米国の大学に留学し、そこで究極のマイノリティーとしての経験をされたそうです。自信があった英語もそのつたなさからか、“His English is cute!”と言われ、ご自身のプライドが崩壊したとおっしゃっていました。しかしそこから自分を見つめなおした結果、個人としての能力の成長につながったと仰っていたのがとても印象的でした。日本は居心地が良いけれど、自分を成長させるためには居心地の悪い環境に自ら飛び込んでいくことが必要とのことで、若いうちにそのような経験を多く積んでおくことが後々の人生に大いに役立つと教えていただきました。自分はなぜ海外で働きたいのか、その理由を考えることも重要であるとアドバイスを頂きました。また、ご自身がアメリカで働くことの意義について、アメリカでは自分の行動に大きな責任が伴うため仕事の達成感が大きいこと、そして経済学の本場がアメリカやヨーロッパであることの二つをあげられていました。

最後にうかがった、トランプ政権や、イギリスのEU離脱に代表されるような、昨今のアメリカや世界のグローバル化に逆行する流れについての、教育制

度と所得格差を交えた考察はとても興味深く、参加者たちも熱心に耳を傾けていました。

東京応化工業アメリカ本社 様 室井 雅昭 GM、Sayo Duberow 様

東京応化工業アメリカ本社(TOK)様では、室井雅昭 GM と、プロジェクト調整役でいらっしゃる Duberow 様からご講話を頂戴しました。内容は多岐に渡りますが、生産されている製品や海外拠点などの企業概要や、室井様がアメリカに赴任されることになったご経緯、また高校時代に家族と渡米し、現地高校へ編入、卒業後、米国の大学へ進学し、そのまま米国で就職された経験を持つ Duberow 様のこれまでのご経験などについてうかがいました。

TOK 様で生産されている薬品は集積回路などの作成時に使われますが、最終的には溶かしてしまうため、完成した回路には一切残らないそうです。しかし、回路の微細化、高集積化には必要不可欠な技術であり、大きな役割を果たしているということでした。

日本では終身雇用が一般的で転職をする人は少ないように思いますが、室井様と Duberow 様によると、アメリカではキャリアアップのために転職をするのが一般的であるとのことでした。それは良い事でもあります。一方で、社員が職場を去る際の技術等の流出に気を付けなければならないということも教えていただきました。また、ご講話の最後には、現在も日本語を勉強していて、学生時代に HUSTEP 生として北海道大学に留学されていた経験を持つチャールズさんからも、日本とアメリカの違いについてなど、お話を伺うことができました。

オフィスと同じ敷地内にある工場見学もさせていただきましたが、製品特性として清浄度が求められる為、人や外部からの汚染を極力避けるような生産工程となっていました。また、照明が黄色の部屋など、初めて見るような設備が多くありました。照明が黄色い理由は、光の影響を受ける薬品を作成しているため、波長が長くエネルギーの低い黄色の照明を使っているとのことでした。

実はご講話の際にはドーナツやコーヒー、ペットボトル入りの水などもご用意いただき、話の途中であってもご自由にどうぞ、とおっしゃっていただきました。これはアメリカの会議などでは普通に行われていることだそうで、参加者もドーナツとコーヒーをいただきながらお話を拝聴するという経験をさせていただきました。



ご講話はリラックスした雰囲気の中で行われました

EPSON Portland Inc. 様 織田 吉夫 常務

EPSON Portland Inc. は長野に本社を置くセイコーエプソン株式会社の海外生産拠点の一つであり、プリンタ用のインク及びインクカートリッジを生産しています。

織田さん（ご本人のご希望で、あえて「さん」とさせていただいております）はそこで業務が円滑に進むように日本の本社とのパイプ役を担っていらっしやっていました。工場内の見学では包装など人の手で行われる作業も少なからずありました。しかし、これから機械化がより進んでいき、工場内の人数は減っていくと



織田常務と記念撮影

のことでした。また、工場内の機械はネットワー

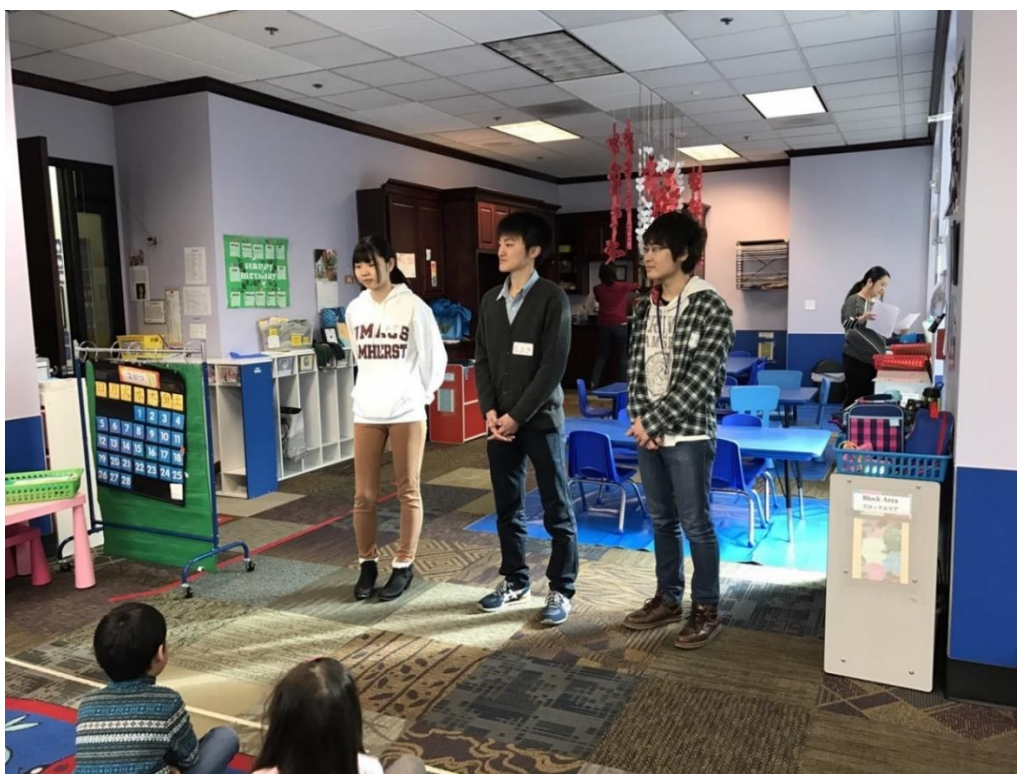
ク化されており、機械の不具合や、製造個数などが徹底的に管理されていたのが印象的でした。

ご講話では織田さんが機械系の技術者から、現在のように上層部として働くようになるまでのご経歴をお話し頂きました。その中で、ご自身が海外で長年働いている理由として、英語能力、文化やコミュニケーションの違いを受容できること、専門分野への知識、専門外の広範囲な仕事経験、そして運の五つをあげていらっしやいました。どれもが大切なことだと仰っていましたが、アメリカで働く上では、様々なバックグラウンドを持つ人がいるため、お互いの文化を受容できることが特に重要とのことでした。また、海外で働くためには運が必要とのことでしたが、織田さんご自身なかなか海外に行く機会に恵まれず、およそ10年間、社内での英語教室、長野五輪に向けた通訳ボランティア育成講座、そして技術翻訳の勉強を通して英語の勉強を続けていらっしやったとのことでした。そのようなひたむきで地道な努力あつてこそ運はつかめるし、夢を叶えられるのだなと感じました。さらに当日夜の会食では、よりリラックスした雰囲気の中で学生時代のお話やこれからの展望についてお話を伺うことができ有意義な時間となりました。

ポートランド日本語継承学校 様

ポートランド日本語継承学校様は親から受け継ぐ言葉（継承語）としての日本語、そして日本文化を学ぶ学校です。毎週土曜日の午前中、幼稚園児から中学生までが、4クラスに分かれて日本での習い事のような感覚で楽しく日本語と日本文化を学んでいました。

FSP 北米参加者のうち、ボランティアを希望した 8 名で訪問させていただきました。まずそれぞれのクラスで、ひな人形を折り紙でつくる活動のお手伝いや、日本の昔の道具に関するプレゼンテーション、日本の中高生の生活についての紹介等を行いました。授業は楽しく、かつ生徒たちの印象に残るような工夫が随所にこらされたもので驚きました。例えば、促音（小さい「つ」）を学ぶ授業では絵とひらがなを使ったかるた形式によって、遊びのような感覚で文字と発音、そして「もの」の対応が学べるように工夫されていました。最後の 4 クラス合同アクティビティの時間には、私たちがひな祭りやよさこいソーラン祭りについて紹介し、北海道の民謡であるソーラン節にあわせて生徒さん達と一緒に踊りました。よさこいソーランを踊るにあたってはまず、私たち北海道大学の学生が映像とともに手本を見せながら教え、最後に全員で合わせて踊りました。振り付けを説明するのは難しく苦勞しました。また、初めは恥ずかしさからかあまり積極的でなかった子もいましたが、段々と緊張がほぐれていき最後は「ソーラン、ソーラン！」の掛け声に合わせて全員で楽しく踊ることができました。



ポートランド日本語継承校での活動

参加者へのアンケート

ここでは、第17回 FSP 北米の参加者に回答してもらったアンケートの結果をお伝えします。

Q1：FSP に参加した目的・理由

第17回 FSP 北米の参加者の参加理由について聞きました！

・海外経験が少ないけど、海外に行ってみたい

「パスポートも持っていないく、海外に行ったことのない自分が海外に行って、海外を体感しようとするうえで、FSP は最も適したプログラムだと感じた。」
「初めての海外経験で、海外に対して不安があり、集団で行けることに対して安心感があったから。」

・今後のキャリアを考えるきっかけ

「将来のキャリア形成を考える上で役立つと考えたから。」
「将来的にアメリカの大学院に進学することも選択肢の一つとして考えている。」
「学校に訪問するだけでなく、海外で働く方のお話を伺えることも魅力的だったから。」

・その他

「英語力を確かめるため。」
「奨学金が出るから。」

Q2：FSP を通して変わったこと、成長したこと

第17回 FSP 北米に参加したことで、参加者の多くは沢山の刺激を受けています。具体的にはどう変わったのでしょうか？

「英語力に関しては、2週間ではさほど上達はしないだろうと思っていたが、予想以上にヒアリングとスピーキング能力が上がった。」
「日本という国と、日本人という枠組みと、とにかく自国に対する見方が変わった。」
「FSP での経験は帰国後の勉強の強烈なモチベーションになった。」
「物事に対して自分の意見を積極的に持とうとするようになった。」

「現地の学生と話したりたくさんの方の企業訪問でお話を聞いたりして、自分の将来について少し考えるようになった。」

「世界で活躍する方々の話をきいて、挑戦したいことが増えた。」

「相対的な価値観を持てるようになった。日本の生活における価値観が絶対的なものではなく、様々な価値観が存在する中での一部にすぎないということが分かった。」

Q3：アメリカでの体験談、失敗談

今回の FSP 北米を通して、参加者各自に自身の体験談と失敗談を書いてもらいました。次回以降の FSP に参加される方の参考にしてください！

・英語の勉強のきっかけ (6人)

「ホテルのエレベーターに乗った時、声をかけてくださったアメリカ人の方がいて、内容は簡単そうなことを聞かれているのだけれど全くなにを言っているのかわからなかったことがあった。悔しかったから帰国後の大きなモチベーションになった。」

「ファーストフード店で、英語なので頼みたいものが伝わらずに食べたいものと違うものが出てきた。」

・食生活の変化 (5人)

「米が恋しくなってベトナム料理を食べたら日本のお米とは似ても似つかないものだった。」

「慣れない食事のせいで 10 日目くらいに胃が限界を迎えて、脂っこいものが食べられなくなった」

・時差 (3人)

「時差ボケで日中眠くなることがつらかった。」

・下調べ (3人)

「人に道を聞いて、間違えた方向を教えられ、たどり着けなかった。自分でもっと調べるべきだった。」

・その他

「チップの渡し方。」

「どこでもクレジットカードが使えるので、現金を持参しすぎた。」

Q4 : FSP の満足度とその理由

・満足 (12 人)

「大人数で過密スケジュールを過ごし、いろいろな経験をさせてもらった。」
「アメリカにおいて 3 都市の企業や学校を訪問することは他の留学プログラムでは経験できない。」

「当初参加した目的が達成されたことはもちろん、自分の期待していた以上に多くのことを学べたから。」

「行く前も帰って来てからも課題は多いが、学べることは多い。」

Q5 : FSP を後輩に勧めるかとその理由

・勧める (12 人)

「大部分の北大生は自分と同様、海外経験も少ないだろうけれども、海外には興味があると思う。海外へのファーストステップとして適切なプログラムだと思う。」

「アメリカでの経験はとても貴重であったのはもちろんだが、一緒に 2 週間すごしたほかの学生ともすごい仲良くなれてとても良かったと思う。」

「最初は何となく海外に行ってみたいという軽い気持ちでも、準備授業などを経てだんだんやる気が出てくるし、スケジュールがびっしりだから時間を有効に使えるから。」

「自分の未熟さを認識することができたから。」

Q6 : FSP に参加した感想

「大学二年の終わりの時期に、大学生活の折り返しのイベントとして参加した。自分の将来についてよく考える機会になったし、この二年間で自分が身につけてきたスキル・思考（集団としての理想的な在り方、煩雑な作業のこなしかたなどなど）を実践する場でもあった。」

「メディアにて海外に関する情報がよく流れているが、必ずしもそれが真実ではなく、多少のフィルターがかかった状態で私たちのもとに届いているのだと感じた。そして、本当に自分は狭い世界で暮らしていたのだと感じた。多様性

の、ほんの一部を垣間見ただけの2週間だったとは思いますが、それでも自分の今までの視野の狭さに気づかされた。」

「今回は留学の一步として参加してみて、初めての海外研修としてさまざまな刺激を受けることができた。今後もまた留学してみたいと思う。また一緒にFSPに参加した学生、アメリカでの学生との交流を通して自分の意見や思ったことを伝えるコミュニケーション能力の向上にもつながったと思ういい体験だった。」

「初めに自分が予想していたより、多くの学びがあった。訪問校の様子や雰囲気を知ることができたことももちろん良かったが、日本とは違う文化圏で2週間生活することで、アメリカ文化の良い点を知るだけでなく日本文化の良い点について考え直す良い機会となった。

タイトなスケジュールではあったが、だからこそ多くの場所を訪れ多くの人に出会うことができ、得るものの多い2週間となった。このプログラムで得たものを今後の自分にとってどう活用していくかをこれから考えていきたい。」

「貴重な経験、手厚いサポート、仲間作りなど様々な面で自分のプラスになりました。ここでの経験をもとに、セカンドステップ以降に進んでいきたいと思う。」

「FSPに参加して、とても有意義だと思った。初めてのアメリカということもあり、知らないことも多くあった。でもそれを乗り越えて、より成長できたと思っている。また14人の第17回FSP参加メンバーとも仲良くなれて、友たちの輪を広げることができた。」

編集後記

ここまで目を通していただきありがとうございます。FSP 北米の海外研修を終えてから、全体報告書及び報告会のプレゼンテーションの作成と、大変な作業が続きました。記録広報班の班長として、うまく作業分担できたどうかわかりませんが、無事終わることができてほっとしています。でもこの一連の作業について、1つ言えることがあります。それは、記録広報班のチームワークが確実に向上していることです。海外研修を終えると、研修で仲良くなった FSP メンバーと会うことは難しいですが、全体報告書やプレゼンテーションの作成を通して、再び集まって交流する機会が生まれました。幾度も北図書館に集まって話し合い、プレゼンテーションを練習することで、確実に仲が深まり、チームワークがよくなっていると感じました。このような経験も FSP だからこそできたことだと思います。本当に感謝しています。そんな記録広報班で作った全体報告書ですが、今後の FSP に参加する人の役に立てれば幸いです。（孫 津 韜）

私は記録広報班では Facebook の更新を担当していました。研修前には訪問国についての情報を調べて Facebook に記事を掲載しました。プログラム中にはその日の出来事や学んだことを記録して発信しました。全体報告書作成のために、海外研修中の出来事について再度振り返るなどの作業もありました。どれも記憶力の乏しい私にとって難しいものでした。しかし、忘れてしまうたびにご講話中にとったノートや、色々な資料等を見返し、また、仲間達にその日の出来事やご講話の内容などを聞くなどして何度も思い出すことで、FSP を通して学んだもの、得たものをしっかりと頭に刻むことができました。これから FSP への参加を検討している人で、もしも参加することになったら、せっかくの機会なので、多少の苦労は惜しまず、できるだけ多くのものを得られるように行動してほしいです。（並木飛鳥）

全体報告書を書くにあたって、FSP の魅力を余すことなく伝えるということに尽力しました。そのような文面を考えるにあたって、自分が経験したことや感じたことを整理することができました。また、記録広報班は FSP から帰ってからの活動が多かったので、FSP で学んだことを、すぐに忘れてしまうことなく、自分の成長に生かすことができました。自分は、海外に対して漠然とした不安を抱いていましたが、FSP に参加することでその不安を解消することが

でき、今後、交換留学か、大学院で海外に行こうと積極的に考えるようになりました。今回の全体報告書を読んで、FSPに興味を持ち、実際に参加する学生が増えていただければ大変嬉しく思います。（田畑陽太郎）

最後の編集後記まで目を通していただいたあなたはきっと、全体報告書を隅々まで読んで下さったのではないかと思います。ありがとうございます。今回の全体報告書作成にあたっては修正に修正を重ねながら、FSP 北米に参加したことのない方にも現地での様子をつかめるように書いたつもりです。いかがだったでしょうか。この報告書を読んで、次回以降の FSP に参加しようと考えてくれる方が一人でも増えてくれたら幸いです。

私自身は FSP 北米に参加したことで、海外で勤務されている方や、留学されている方、また、一緒に参加した FSP 北米の仲間など多くの方のキャリアデザインについて聞くことができ、曖昧だった自分の将来に対する考えをより具体的なものにすることができました。

この FSP 北米での経験を糧として、これからのセカンドステップやサードステップ、ひいては人生そのものに役立てていき、数年後、数十年後に成長した姿をお世話になった方々に見せたいと思います。（橋本直暉）

謝辞

今回の海外研修プログラムでは、訪問させていただいた企業、組織の皆様、協定校等の教育機関の皆様、また、海外経験の少ない我々を引率して下さった国際連携機構の石倉香理さんと国際部の佐川浩太さん、そして FSP の科目責任教員であり準備授業を担当して下さった国際連携機構の肖蘭先生など、多くの方々のご協力のもと、実りある研修を行うことができました。心より感謝申し上げます。

また、第 17 回 FSP 北米の仲間たちなくしては充実した研修を送ることができませんでした。ただただ感謝の気持ちでいっぱいです。

しかしながら、我々にとって今回はあくまで“ファーストステップ”。今回得た経験を糧とし、さらなる飛躍を遂げる所存ですので、今後ともご指導ご鞭撻の程、宜しく願い申し上げます。

第17回FSP北米 全体報告書

平成29年4月26日

編 集 第17回ファースト・ステップ・プログラム (FSP)北米 記録広報班
(孫、橋本、並木、田畑)

問 合 せ 先 北海道大学 国際連携機構 国際オフィサー室 (国際交流課)
電話 : (011)706-8040/8032
Email: ambitious@oia.hokudai.ac.jp
Facebook : <https://ja-jp.facebook.com/1ststepprogram/>
Twitter : https://twitter.com/fsp_171819